

河野哲也 編
得居千照・永井玲衣 編集協力

『ゼロからはじめる哲学対話
哲学プラクティス・
ハンドブック』

ひつじ書房、2020 年
376 頁、2,200 円（税別）

あなたは、どこで哲学対話に出会ったのだろうか。

学校で、街中で、あるいはオンラインで。

あなたはどのようにして、哲学対話をはじめたいと思ったのだろうか。

哲学に、対話に、あるいは、そこで行われていることに、何かを感じとったのだろうか。

本書は、『ゼロからはじめる哲学対話—哲学プラクティス・ハンドブック』という名前が付けられている。そのタイトルに触れ、はじまりを、思い起こしてみる。

初めて哲学対話のことを知ったのは、誌面だった。問いの元に、人が集い、言葉を交わし、共に考える。そんな活動があるんだと興味を惹かれた。それからしばらくして。初めて行った哲学カフェの光景を覚えている。小さなカフェに丸椅子が並び、人々がぎゅうぎゅうに座っていた。それから約 14 年間、子供や大人と、学校や街中や、美術館や、様々な場所で、哲学対話を行ってきた。本書には「すでにそれらを実施しているけれども、い

ろいろ疑問を抱えていたり、うまくいかないで悩んで」（「はじめに」p. iii）きた 1 人である私が直面してきた、様々なことに関するヒントや知恵が詰まっている。

本書は全 5 章から成る。「序章：深い対話とはなにか」で、哲学対話の定義、歴史や対話の意義、対話と思考の関係に関する心理学について概説し、「第 2 章：対話の目的と方法」で様々な哲学対話のありようを紹介する（いろいろなワークも紹介されているのだが、文字だけでは伝わりにくい部分があり残念だった。ワークシートの図版等の掲載を希望する）。「第 3 章：対話の実践方法」では、対話の場所と環境、目的とファシリテーション、対話の進め方と終わり方、記録の仕方、題材と教材、道具、さらには困ったときのヒントまで、細やかに解説されている。続く「第 4 章：知っておきたい哲学のテーマの概説」では、「人生と生き方」や「倫理と道徳」といったテーマに関連する哲学者やその考え方が紹介される。最後の「第 5 章：付録」は特に注目したい。そこには、「倫理基準」と「オンラインによる哲学プラクティス」に関する節がある。2020 年代に哲学プラクティスに関わる者なら、読んでおきたい内容だ。

全体を通して、本書の執筆者たちが紡いできた理論や実践が惜しみなく公開されている。実践を続けることは、時に容易ではない。歩み、楽しみ、喜びとともに、つまずき、悩み、苦しみがある。やめることは、時に容易だ。でも、それでも、と思う時、本書は力を貸してくれるだろう。

でも。なぜ、あなたは「それでも」と思うのだろうか。哲学対話のファシリテーションができるようになる（あるいは、うまくなる）ために？あるいは「生産的な話し合いをするために？」「深く

考えるために？」「集団の結束力を向上させるために？」（「はじめに」 p. iv）。

私に限って言えば、あの光景に出会ったから。そして、また出会いたいと思ったから、に尽きる。幾多の声が響き合う光景。それに出会い続けるために、ただ、その場に身をおき、身をひたし、そこで語られることをきくこと。その声に耳をすまし、語られなかったことに思いを巡らし、いつか語られる日がくることを願うこと。すべてが語られるべきとは決して思わないけど、飲みこまれ、なかったことにされた「語られなかったこと」、語ることをゆるされなかったことがあるなら、そのことが、いつか語られる日がくることを願うこと、をし続けてきた。それが、哲学プラクティスと呼べるものなのかどうかは、正直、いまだにわからない。ただ今にして思うのは、あのとき、私が私としてその場にいる方法としてつかみとったもののひとつが、哲学対話と呼ばれるものだった、ということだ。

あなたはどのようにして、哲学対話をはじめたいと思ったのだろうか。なぜはじめざるを得なかったのか。そして、続けているのだろうか。本書を手にし、はじめてみたなら。その答えをどこかで、ぜひ、聞かせてほしい。

井尻貴子

(NPO 法人 こども哲学おとな哲学アーダコーダ理事)